

論文審査の結果の要旨

氏名：鈴木敏浩

博士の専攻分野の名称：博士（歯学）

論文題名：顎矯正手術適応患者の顎関節窩最菲薄部厚径の CT による検討-骨格性下顎前突症患者について-

審査委員：（主査） 教授 大木秀郎

（副査） 教授 本田和也

教授 鈴木直人

教授 清水典佳

本研究は、骨格性下顎前突症患者の CT 検査の画像データを利用して、骨格性下顎前突症患者の手術前後ならび顎関節部に異常のない患者の顎関節窩の最菲薄部（roof of the glenoid fossa:RGF）の厚さを比較検討したものである。

顎変形症は、顎顔面変形症に含まれ、顎顔面骨格、軟組織と称する顔の輪郭、咬合状態などに高度の異常を伴うものである。様々な症状を呈するが、咬合異常や発音障害、顔面の変形など口腔領域機能や形態異常が顕著であれば、顎矯正手術を施すことになる。近年、顎変形症患者は増加傾向にあり、その治療として顎矯正手術も増加している。それに伴い、偶発症として起こる顎関節症も増加していると推察される。顎変形症と顎関節症の関連も未だ解明されていない現状にあり、その原因解明は重要と考えられる。顎関節について Computed Tomography (CT) 画像を用い細部を計測した研究報告は多くあるが、顎変形症との関連性に関する報告は少なく、下顎枝矢状分割術適応患者の CT 検査の画像データを利用して、下顎頭の骨形態変化について検討した報告のみである。そこで本研究では、RGFに着目し、骨格性下顎前突症と診断され下顎枝矢状分割術適応患者の CT 検査の画像データを利用して、手術前後ならび顎関節部に異常のない患者の RGF の厚さを比較検討した。

顎変形症治療のため日本大学歯学部附属歯科病院へ来院し、口腔外科にて、骨格性下顎前突症と診断され、下顎枝矢状分割術が施行され、顎関節症状がなく術前および術後 1 年に CT 検査を受けている患者を対象とした。男性 13 名、女性 17 名の両側顎関節（計 60 関節）を手術群とした。コントロール群として、顎変形症および顎関節症の症状を認めない患者として、男性 15 名、女性 15 名の両側顎関節（計 60 関節）を無作為に抽出した。下顎枝矢状分割術の術前と術後 1 年にマルチディテクター CT にて撮影した画像の前額断像にて、手術群およびコントロール群の RGF の厚さを計測した。その計測値より、手術群の RGF の厚さ、コントロール群の RGF の厚さ、年齢別における RGF の厚さについて比較検討した。

その結果、以下の結論を得た。

1. 骨格性下顎前突症患者の術前および術後の顎関節窩の厚さの比較において、顎関節窩の肥厚に有意な差は認めなかった。骨格性下顎前突症患者の顎関節窩の厚さは、コントロール群より有意に厚く、肥厚傾向を認めた。
2. 骨格性下顎前突症患者の顎関節窩の厚さは、各年齢においてもコントロール群より有意な肥厚傾向を認めた。

以上のように本論文は骨格性下顎前突症患者の顎関節窩の骨肥厚変化が示されたものであり、歯科放射線学ならびに関連歯科領域分野に寄与するところが大きいものであると考えられた。

よって本論文は、博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

平成30年3月7日